

バレ句に学ぶ日本文化

バレ句の第一人者 ジョン・ソルト氏

「西松布咏 唄と三味線
（伝統前衛）」と銘打たれた第一回ニューアンスの会（美紗の会主催）が開催されたのは、七月十八日の夕刻。会場となった東京・日比谷公園内にある松本楼の一室は、限定七十名という参加者で埋め尽くされていた。

ゲストには、本誌に好評連載中の作家・山口椿氏をはじめ、詩人のジョン・ソルト氏や藤富保男氏、カルトの神様と称される松岡正剛氏、舞踏家の若林淳の五名が迎えられ、西松氏の三味線の音に併せて詩の朗読、舞踏が約二時間ほど行われた。

この日は、朗読の中に「詠風末摘花」、いわゆるバレ句は登場してこなかったが、ジョン氏は米国の Amherst College（アマースト大学）・アジア学部の日本文学専攻で「詠風末摘花」を教えていた経験があり、今から三年前のインディアナ大学の学会で、その研究論文「WILLOW LEAFETS」（柳の葉末）を発表、さらに翻訳した約四十句のバレ句を学者や院生の目前で口誦したこともある。その時に西松氏に「役買ってもらったことがあった」。

「当時、日本でも浮世絵の学会の中で春画を少し取り上げたことはあったけど、この学会みたいに江戸セクシヤリテイだけのものはありませんでした。僕は詩が好きで、ほかの人がバレ句をやっているのを見たので、翻訳をしたらおもしろいと思いました。西松

さんは、その学会のソロ演奏者として、地唄や三味線を披露してくれました。その時に、僕が句（バレ句）を読みあげ、西松さんに、その途中途中に三味線を弾いてもらったわけです。最初はニコニコしていた観客も、途中で困った顔をして、最後には、なによりこれの表情でした。最後の十句ぐらいいは、僕が英語で朗読してから、西松さんにそれを唄ってもらいました。発表後、「わたしは一生でこんなにもつとないものはみたことない」と僕にいった先生もいたんですが、僕は「先生、あなたのためでした」と申し上げました（笑）。ほかにも、「あなたの口から出た言葉は下品だったけど、彼女から出てきたのはとても上品で、同じ句とは思えなかった」という人もいた。その落差が楽しかったですね」

バレ句はセクハラ？

お能、歌舞伎、古今集、万葉集、源氏物語の古典以外にも、川端、三島などの現代の主流を一通り授業で教えたが、学生に日本文化を教える中で、詠風末摘花は古典のアンダーグラウンドとして、当時の世界観、生活観を知る重要な教材としてとり上げた。

「主流ばかりだと、アンダーグラウンドが存在するかどうか、わからないかもしれない。しかしアンダーグラウンドをピックアップすると主流も勉強しないとけない。何に對して反対しているか、そういうことを考えないでいられなくなる。だから両方しまし

た。それに、裏から見ると、いろいろ見えてくることもあるんです。みんなのマインドをフックしたいと思いましたが。高校を出て、大学に入ると、一つの範囲の中で考えてしまうようになっていまして。だからそれを壊したり、拡がらせたりしたかったんです」

敬虔なクリスチャンからの抗議もあった。だから、春画のストライドを見せる前には生徒にそのことを予告して、その授業に参加するか否かを各人の判断に任せた。しかしジョン氏は言う。知らずして否定する前に、当時の人々の心境に入りこみ、何を考えたのか、ということを選び、想像することが大切だと。

「アメリカで美術を教えている僕の友人なんか、江戸時代を飛ばして、桃山時代から明治までをやっていました。理由は、版画や浮世絵を説明する時に、遊郭の話をしたくない、しかもそれには売春という言葉が使わないといけないから、やめたと言うんです。訴えられるといやだからね」

これは日本の川柳界においても未だに取り沙汰される問題。現に、本誌創刊号予告広告を見て、「バレ句一切載せろべからず」の文書がどれどど編集部に届いたことか。「その動きはおもしろいですね。有心無心という言葉があります。有心は硬派で、無心は自由なものとすると、無心が俳諧になったかと思うと、いつの間にか有心的になって重くなる。それで川柳が自由！ となるけど、またそれが窮屈になったときにバレ句ができたとか、いつもそういう緊張がありますね」

R・H・ブライスとの出会い

「柳の葉末」は一八四三年にできましたが、（その本には）五人組の判子が押してあるんです。これは徳川の封建制度の硬さと思うけど、みんながOKを出したんですね。それがおもしろい。というのは、今のアメリカや日本ではダメだ、ダメだと言っているから。でも我々は民主主義で自由だと思っている。何が自由だ。今、「柳の葉末」は一冊の本として書店に出ているけど、やっぱりタブーの部分が強いですね。何がいいか悪いかは時代によって変わってくるんですよ」

ジョン氏が川柳と出会ったのは、スペインのイビサ島に一年半生活していた十九歳の頃。R・H・ブライス著の英訳川柳の関連本を手にとりかかった。「おもしろい」と思った。バレ句については、十年前、詩人であった友人から「柳の葉末」の限定版を手にしたことが研究への発端となった。

「僕はタブーを破るのが好きなんです」と青い目を細めた。タブーは触れることでタブーでなくなるでしょ。わからない言葉、句意への探求心。辞書を繰って謎が解けた喜び。「普通の辞書に載っていない言葉がたくさんあります。隠語辞典が欲しくなりますね」と笑う。

「外国では俳句はだれでも知っています。僕も小学四年のころに（アメリカの）学校で書かされました。今でもやっているといますよ。川柳の場合は、そうでもない。それにバレ句をしゃべっている人は日本文学を専攻している人の中でも少ない。翻訳は五七五の枠の中で考えた時はいいものがでてこないのだから内容を重視しています。なんとか短くして、どうせ、日本語のもっている様相は英語では出てこないから五七五にこだわることはナイ」

アメリカの現代詩の中でハイクというジャンルがありまして、それしか書いていない詩人はたくさんいますよ。読んでもみると、俳句の精神をちゃんと吸収したのも多いけど、日本の俳句というより、英語の俳句と言います。ひとつの小さいものを観察する、つまりマイクロコスするものがハイクと書いているわけですよ。「英語の俳句」についてのルール本も数冊持っていますよ。ほとんど内容は川柳なんですけど、俳句だ、といっていただけます。

「僕が生活詩でしよう。浮世草紙もそうだけど。それで注釈をつけると、蛇足みたいでつまらなくなる。注釈の長さで、短い句を殺してしまう。句のウイットがなくなってしまう。そうすると数学でもいんじやないかって（笑）」。

似顔絵であて入れをする長局
staring at an actor print
the haem chambermaid
inserts her dildo
我指で在スが如く
後家よがり
with her finger as if he
were inside—the widow's
organism
（「柳の葉末」より）

興味本位でなく、これらの句を時代考証、生活考証に役立てる。前者の句は、「似顔絵」というのは、歌舞伎役者のことでしょうか。「二句目についても「寂しさも漂う句。当時の後家の生活がのぞけます」と学者の顔を見せる。作者の雅号が、それら作品のほとんどに残されている。その中には「鼻山人」とよばれる鼻の絵を雅号に使う作者もいた、という。

今年の春、アメリカ・ボストン美術館で春画の展示会があり、世界的なニュースとなった。そこには日本の美術館では考えられない光景があった。子供から大人まで鑑賞できるように、美術館の壁が、歌麿の春画一色に染められていたからだ。大規模な展覧会では世界初だという。しかも、それに対する抗議は一切なかったと聞く。何が自由か、彼の言葉が更に重くのしかかってきた。【木村由華】

今回は、「美紗の会」の催しの感想をニューフェイスの方々に協力いただきました。又、特集として、葉文館出版「月刊 オール川柳」より抜粋した準会員のジョン・ソルト氏の一文を掲載いたしました。

幅広く日本文化を考えるきっかけになればと願っております。来年もますます紙面を充実したいと思っておりますので、皆様の協力をお願い申し上げます。 大久保

